

西田教行教授の講演を聞いて改めてその重要性を認識したのは、感染症対策をめぐる対話の場、あるいは議論の場をつくり、それを深めていく必要があるということであった。

もちろん、2019 年末から始まった COVID-19 のパンデミック下においても、議論は盛んに行われた。しかしその多くは、実行される対策が（費用対効果、あるいは経済との兼ね合いという観点から）有効か否かという、目の前の脅威に対する直接の施策の是非を検討するものであったように思う。

それでは、「平時」に求められる議論とはどのようなものだろうか。一つは、講演の中でも言及されていたように、過去のパンデミックに対するふり返りであろう。領域総会初日の趣向の一つとして、COVID-19 のパンデミックを一言で表すというものがあったが、私自身そこで挙げられた言葉を聞いて、「そういえば」と当時を思い出すということがたくさんあった。逆に言えば、それだけ私も当時の記憶を忘却しつつあるのだ。これに関しては、本共同研究が日本の COVID-19 パンデミックのアーカイブ化をその目標の一つとして掲げていることは極めて重要であると言える。

いま一つは、次なる感染症のパンデミックに我々はどう対応するのかということである。ここには、具体的に予防や制圧のためにどのような対策を実施するのかということだけでなく、我々人間が生存し続ける限り避けては通れない「感染症」という存在と、どのような態度で向き合うのかを考えるということが含まれよう。これは、自分はどのように生きたいのかという根源的な問いとも結びつくものであり、もちろん簡単に総意を得られるということはない。だからこそ、まずは気兼ねなく対話ができる空間をつくりたい、そして対話の土台となるような知を提供できるようになりたいとの思いを強くした。

こうした機会を与えて下さった西田教授に、改めて深く感謝したい。